
悪魔と契約！【牧田祐司の場合】

あやのん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔と契約！【牧田祐司の場合】

【Nコード】

N6692F

【作者名】

あやのん

【あらすじ】

悪魔が願いを叶えます。気分が続けるかも

(前書き)

すごく短いですよ

女子高生に声を掛け、人気のない路地裏へと引つ張り込むことに成功した不良二人。

誰も見ていないのをいいことに、嫌がるその女子高生に言い寄る姿がなんとも滑稽だ。

その様子を牧田祐司だけはずっと見ていた。街中から路地裏までの間ずっと……。

「クソっ……」

女子高生も最初はまんざらでもなく会話をしていた。だが今は場所が場所だけに、不安を隠すことが出来ないでいる。

この事態に対し、有効なアクションを起こせない自分が情けなくて、普段しないはずの舌打ちすらも出てしまう。

祐司はその女子高生が好きだった。

中学校の時から想いを寄せ、それを誰にも吐かず、打ち明けることも出来ないでいた。

それにしても偶然目撃したとはいえ、あまりにも不甲斐ない。

「俺に力があれば……」

どちらかといえば運動も不得手で、腕っぷしにも自信がない祐司は、何か策はないものかと頭をひねる。

そんなことをしている間にも時間は無情にも過ぎる。時間が経つにつれて男女の距離は明確に縮まっていく。しかしそれは同意による収縮ではなく、片方の一方的な進行。

祐司は今までケンカなどしたこともなく、しかも相手のガタイもいい。勝てるわけがないと、そう考えていた。

「誰か……」

声は殺しているが、必死に祈った。

「お困りかい？」

後ろからの声にすぐさま振り向くと、そこには長身の男が立って

いた。

黒いズボンに黒いシャツ、髪は肩ほどまでありながら毛先は外へと向いている。顔は、いわゆる「イケメン」というやつだろうか。今風の若い男だった。

「困ってるんだろ？ 助けてやるぜ？」

祐司は思った。この人が止めに入ってくれるのかもしれない、と。しかし帰ってきた言葉は信じがたいモノ以外なんでもない。

「俺は止めにはいらねえぞ。俺はお前の願いを叶えに来ただけだ」
自分の胸の内を探られているのではないかと思うくらい、それくらいの確で、それ以上に意味のわからない返事。

それでも祐司は臆することなどしなかった。

「願いを叶えるって……じゃあお願いします。あの人を……」

「ちげーだろ。お前はあの子を助けるための力が欲しいって願ったんだ」

そして続けざまにこうも告げた。

「俺は悪魔だ」

楽しそうに薄く笑う悪魔。馬鹿馬鹿しいにもほどがあると、悪魔に背を返し女子高生の方に目を向ける。

さつきよりも距離が近付き、もう時間がないと悟る。

「力が欲しいならくれてやるが……どうするよ？」

信じるのが愚かな甘い誘惑。

このままここでこうしているくらいならと、迷った挙げ句にその申し出を受ける祐司。

「本当に大丈夫なのか？」

「心配するなよ。ほら、目え閉じろ」

言われるがままに目を閉じる。そして悪魔は祐司の額に触れた。何かが体を駆ける感覚の後で、目を開けた先には悪魔の姿はない。残されたのは祐司の手にみなぎる力。

確証はないのに自信だけはある。全ての思考を振り切って不良たちへと走り出した。

「うおおおお！」

いきなりのかけ声にひるんだ隙に一人目の顔を殴った。

ものすごい距離を浮遊した男はゴミの密集地帯へと姿を消す。

嘘ではなかった。悪魔に力をもらったのだ。

その勢いのままもう一人を殴る。もう一人の不良も粉塵のように中を舞った。

そして、向き直った先には想い人。

「大丈夫だった？」

別に座り込んでいるわけでもないが手を伸ばす。そういう空気だと感じたのだろう。

「うん……ありがとう」

おずおずと差し出される小さな手。そして想い人と手が触れる。嬉しくなつて少し力を入れて握った。

その瞬間、何かが割れる音がした。何かが碎ける感触がした。

「いやあああああああ！」

今まで祐司の元にあった彼女の手は、彼女の胸の中にあり、彼女は涙を流しながら反対の手で包み込んでいた。

「痛い！ 痛いよお！」

わけがわからない。呆然と立ち尽くすことしか出来なくて、頭の中が真っ白になる。

ただ手を握っただけ、それだけで彼女の手を碎いてしまうほどの『力』を手にした。

こんなはずではなかった。ただ敵を倒す力が欲しかっただけなのに、文字通りに力を持ってしまった。

涙を流し逃げる彼女を必死に追おうとする。

「待って！」

一歩踏み出した瞬間、足は地面に埋まっていた。

さっきまでは普通だったはずなのに、今はアスファルトを貫いている。そして簡単に引く抜くことができた。

まごまごしている間に、ズボンが濡れていることに気付く。

暗い路地裏でもわかるほどに、ズボンを濡らした液体は赤い。
地面を伝ってきたその液体の先へと、ゆっくりと視線を向けた祐
司は驚愕した。

先ほど殴り飛ばした不良の頭が割れ、そこから流れ出る赤
体中が震えに侵され、不規則に鳴り始める自分の歯。
怖い。怖くて仕方がない。

悪魔にもらった力は、不必要な強さをむき出しにしている。

「う……うわあああああああああ！」

真っ白になった頭は、次第に意識を落としていく。

尚も彼女の絶叫が耳に残ったままに……。

「はっ」

その出来事が夢だとわかるまで数秒。

時間が巻き戻ったとさえ錯覚する生々しさ。しかし祐司はもう迷
わなかった。

悪魔が先ほどいた場所を見つめ、小さく首を縦に降ると、不良た
ちへと勇ましく向かっていった。

その姿を物陰から目で追い、悪魔は笑みを浮かべる。

「おめーに足りないのは力じゃない。一步踏み出す勇氣だよ」

ケンカにもならない争いに背を向け、悪魔は闇に溶けるように消
えていった。

「ざけんなよクソ野郎！」

「うう……」

勝負以前の問題だった。が、祐司は晴れ晴れとした気持ちで倒れている。

体中が痛みを叫ぶのも苦にならないくらい爽快だった。

「だい……じょうふ？」

祐司の元へと歩み寄り、ハンカチで頬を伝う鼻血を拭ってくれた。「え？」

呆気にとられる。何故ならばその子は祐司の想い人だったから。

「鼻血、固まっちゃって拭けない……」

彼女が困った顔で視線をぶつけてくる。それがやけにおかしくて、ついつい笑いがこみ上げてしまった。

「ははは……」

目を丸くする彼女をよそに、祐司は悪魔という世間では嫌われている単語を好きになれる気がした。

「ありがとう」

虚空へと手向けた言葉は宙をさまよい、誰にも届くことはなかった。ただ、この晴れた気持ちをキルトに伝えたかっただけ。

「なんでもないよ。とりあえず家まで……」

立ち上がるうとするが痛みで動けない。

「ふふ、私が送って行くわ」

それを見て笑う彼女。笑われても嫌な気はしなかったのだろう。

無様にもケンカに負けた少年に肩を貸す女の子と、無謀にも勇ましく、自らをかえりみない少年が意識し始める瞬間だった。

END

(後書き)

ひよ

これからの展開に期待

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6692f/>

悪魔と契約！【牧田祐司の場合】

2010年10月8日15時44分発行